

井上ひさし

しみじみ日本・乃木大将



井上ひさし

新潮社

しみじみ日本・乃木大将



印刷 ■昭和五十四年九月三十日

発行 ■昭和五十四年十月五日

著者 ■井上ひさし

定価 ■九〇〇円

しみじみ日本・乃木大将



発行者 ■佐藤亮一 発行所 ■株式会社新潮社

郵便番号一六二ノ東京都新宿区矢来町七一ノ電
話〇三一二六六ノ業務五一ノ一ノ編集五四ノ一ノ
／振替東京四一八〇八

印刷所 ■東洋印刷株式会社

製本所 ■神田加藤製本

©Hisashi Inoue Printed in Japan 1979

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

しみじみ日本・乃木大将…………… 3

日の浦姫物語…………… 123

初演記録…………… 234

アートディレクター・長友啓典
ブックデザイン・野村高志
イラストレーション・東 君平

しみじみ日本・乃木大将

時

基本となる時間の流れは、大正元（一九一二）年九月十三日、明治天皇大葬の日の、午後六時から午後八時までの二時間。

所

基本となる場所は、東京赤坂新坂町の陸軍大将、学習院院長、伯爵乃木希典邸の厩舎^{きゆうしや}。

馬たち、および人びと

こと（壽^{ことぶきごう}號の前足）

ぶき（壽^{ことぶきごう}號の後足）

あら（璞^{あらたまごう}號の前足）

たま（璞^{あらたまごう}號の後足）

乃^のの字（乃^{のぎごう}木號の前足）

木の字（乃^{のぎごう}木號の後足）

くれ（隣邸^{くれないごう}のメス馬「紅^{くれないごう}號」の前足）

ない（隣邸^{くれないごう}のメス馬「紅^{くれないごう}號」の後足）

はな（近くの馬車屋のメス馬「英^{はなふさごう}號」の前足）

ぶさ（近くの馬車屋のメス馬「英^{はなふさごう}號」の後足）

陸軍大将乃木希典閣下

乃木大将夫人静子様

感心な辻占売りの本多武松少年（ただし現在は酒屋三河屋の小僧）

1 書生志願

開幕のベルが鳴り終ると同時に、さまざまな音が聞えはじめる。その音は、たとえば、

「竿や、青竹」の竹屋、

自転車のベル、

馬車のわたち、

豆腐屋のラッパ、

厩舎の床を搔く馬蹄、

電車、

などである。

できればこの部分は、効果音で構成された「音でつづる明治末期の初秋のあるたそがれどき」といった風の一個の作品であってほしい。

客席がこれらの音に聞き惚れているうちに舞台に照明が入る。するとすでに幕はあがっていて、舞台いっぱいには既舎。既舎は夕陽を上手の方から受けて、赤々と燃えるように輝いている。

この既舎は、煉瓦造りの洋風建築で、右端（すなわち上手際）が馬丁部屋、その他のは三等分されていて、右から順に、

壽號（流星の栗毛。十歳。正馬）

璞號（流星の鹿毛。六歳。副馬）

乃木號（紅梅の茸毛。五歳。副馬。水師宮でロシアの陸軍中将ステッセル將軍から贈られたアラブ産白馬「壽號」の子）

の、將軍の愛馬が三頭入っている。

上手の馬丁部屋の前に井戸がある。正門は上手の袖の内にあり、下手は乃木邸の勝手口へ通じている。すなわち、客席の下手半分ぐらいに乃木邸が建っているわけである。

舞台上に照明が入ったとき、璞號と乃木號はだれている。壽號だけは別で、憂々（うれ々）と馬蹄で神経症的に床を掻いている。

と、音がぴたりと収まり、照明がたそがれどきのそれから、夜のそれへと変る。

音の消失と照明の変化をきっかけに、壽號はきつとなって下手をみる。乃木號と璞號も下手を注目する。砂利を踏む音がして、乃木大将夫妻が登場。静子夫人は薩摩焼の大鉢を捧げるようにして持っている。大鉢に積みあげてあるのは、三頭の馬の好物であるカステラである。

なお、このときの乃木大将の服装は、大日本帝国陸軍大将の正装。夫人は第一期喪服。すなわち、この日の朝八時に、赤坂田町の秋尾写真館主・秋尾真允に撮らせた、あの有名な記念写真と同じいでたちである。

乃木將軍は、思い入れたっぷりに三頭の馬を見ていたが、やがて、

乃木將軍 長い間、世話になったな。

ト呟くように言い、夫人の持っている大鉢から、カステラを三切れとり出し、

まず壽號に、

乃木將軍 壽號よ、わしと静子は、長い長い、長い旅行に出かけることになった。淋しげらずに達者で暮すのだぞ。それにしても壽號よ、おまえはなかなかの暴れ馬であつたな。思ひ出すぞ、あのときの腰の痛さを。あれはいつであつたか、四谷見附の手前の坂を学習院に向つて速足で駆けているとき、突然おまえはヒヒーンと後足で立ちあがり、乗っていたわしを地面に投げ出した。何におどろいたのだね、あのときは。馬の背から放り出されたのは、あれが生涯で二度目だ。いうならば、わしはめつたに落馬はしない男なのだが、あのときはなぜ……。

カステラをたべさせながら考え込む將軍に、静子夫人が声をかける。

静子夫人 世間では「乃木將軍の趣味は刀剣と馬。さすがは古武士にふさわしい趣味だ」と申しております。ですから、わたしにもあなたがご自分の馬と別れを惜しむ切ないお気持はよくわかるつもりでございます。けれども程なく、宮城から、前の天皇様の御遺骸を乗せた御鳳輦の出発を報せる大砲の音が聞えてまいりましょうし、その前にわたしどもが致さねばならぬことも、まだいくつが残っております。御馬車が出るまでもう二時間もございませぬ。

乃木將軍 うむ、残り時間がすくなくなってきましたな。

乃木將軍は壽號の頸をピタピタと叩いて愛撫し、璞號の前に立ち、

乃木將軍（そつけなく）璞號よ、元氣でな。

璞號の口にカステラを押し込んで乃木號の前に歩を移す。

乃木將軍 乃木號よ、おまえの父親の「壽號」とも会って別れを告げたいのだが、今となってはそれもならぬ。この先、おまえが父親に会う機会があったら、乃木がよろしく申していたと伝えておくれ。壽號。あの馬も天晴れな名馬であつたよな。乃木號も知つてのとおり、おまえの父親はロシア国のステッセル將軍の乗馬であつた。忘れもせぬ七年前の明治三十八年の一月五日、すなわち、旅順開城の規約締結調印されて三日目の正午、わしは旅順郊外水師營において、ステッセル將軍と会見した。旅順をきつと落す、いや決して落されるものか、とたがい死力を尽して百五十日間も闘つた間柄だ。わしとステッセル將軍とは、相手を見る前から、すでにして心を許し合つていた。そこでわしはステッセル將軍に、鶏五十羽とブドー酒三十本贈つたが、そのお返しにといつて彼がわしにくれたものこそ、彼の名馬「壽號」だったのだよ。勿論、「壽號」とは、わしが後でつけた名前だ。ステッセル將軍の「ス」をとり、亡き母上の御名が「ことぶき」と「子」とを連ねて壽子なので、その「ことぶき」を頂戴して「壽」としたわけだが、おまえの父親がどれほどの名馬だったかという……（静子夫人に）すぐ終ります。もうちょっと待っていてください。（乃木號に向き直り）帰国し

てから一年間、わしはその壽號^{スズゴウ}を自分の主馬にした。すなわち主として壽號^{スズゴウ}を乗りまわしていたのだ。ところがある日、赤坂見附の坂をおりて行く途中、壽號^{スズゴウ}がいきなり竿立ちになり、わしは生れてはじめて、馬から転げ落ちた。いったいどうしたのだろうと腰をさすりながら見上げると、壽號^{スズゴウ}は黄色い歯をニィッと剝いて笑っていた。わかるかね、乃木號。おまえの父親は元の飼主ステセル將軍の恨みを晴したわけなのだ。旅順での元の主君の仇を赤坂で討ったのだよ。畜生ながら天晴れではないか。事の本質において赤穂の四十七士とまったく変るところがない。主君の仇を背中に乗せて歩くのはなるほど愉快なことではないだろう、とわしも反省をしてな、壽號^{スズゴウ}を鳥取の佐伯牧場へ種馬として寄託し、やがておまえが生まれた。よいか、乃木號、自分がそういう名馬の血をひいていることを片時も忘れるでないぞ。

ここで乃木將軍は数歩さがって厩舎全体を、なつかしそうに眺める。そして三頭の馬に目で別れを告げて、

乃木將軍　さらばじゃ。

ト挙手の礼を送る。静子夫人は大鉢のカステラを幾切れかずつ、三頭の立つ床に置き、乃木將軍の傍に戻って、静かに頭をたれる。

馬たちは不安そうに顔を見合せ、ふしぎそうに頸をひねっている。

乃木將軍 では、静子。

静子夫人 はい、あなた。

乃木將軍と静子夫人が下手へ退場しかかる。そのとき、上手から十四、五歳の少年が飛び出してくる。筒袖の着物、烏打帽、紺の前垂れ、腰には注文伺い帳。典型的な小僧姿である。

少年 一生のお願いでございます。

少年は土下座をして地面に額をこすりつける。

静子夫人 おやおまえはお酒屋の小僧さん……？

少年 はい。三河屋の小僧です。

静子夫人 注文でしたら明日の朝になさい。(微かに頬笑んで) この家では、明日からしばらくの間、お酒がたんと入り用になるはずですからね。

少年 奥様、御用聞きに上ったものではありません。そのうぼくは……

静子夫人 時間がないのです。明日にでも書生の大高君におっしゃい。

乃木將軍 待ちなさい。あの少年とはどこかで会っているような気がします。

静子夫人 それはもう、うちに毎日のように出入りしている小僧さんですもの。

乃木將軍 いや、ここで会ったのではない。たとえば夜の、どこかの暗い横丁で……

ト歩み寄ってしげしげと見る。少年は不意に甲高い声を張りあげて、

少年 淡路島通う千鳥の恋の辻占ア……

乃木將軍 おお、あのときの感心な辻占売りの少年ではないか。

少年（喜色で顔を輝かせ）はい、閣下。あのときの本多武松少年です。

乃木將軍 奇遇じゃのう。

少年 ほくには奇遇でもありません。この半年、この機会のくるのをじっと待っていたんです。閣下、やっと思いが叶いました……。

うれしさのあまり少年は泣く。

静子夫人 いったいこれは、どういうことなのでございますか。

乃木將軍 ちかごろこの東都において人気を博している講談語りに桃川若燕と申すものがおる。

日露戦役の旅順要塞攻略戦のときに、わしの部下の、そのまた部下の、さらに部下の一兵卒、上等兵だった男だが、この若燕が『乃木將軍と辻占売りの少年』という題の講談を語っていま大人気らしい。で、そのモデルがじつにこの武松少年なのじゃよ。少年の父親は日露戦役の折り、旅順の要塞のひとつ松樹山で戦死をとげた。この少年の周囲の大人たちは、

「乃木は作戦の下手な、愚直者だ。武松の父親は、いつてみればその乃木に殺されたようなものだ」

と騒ぎ立てる。だが少年は朝は京橋の新聞社の新聞配達、夜は九段富士見町界隈の花街で辻占売り、そうやって病身の母親の薬代を稼ぎながら黙々と学校へ通っている。無欠席の皆勤賞よ。

少年　ちがうんです。身体がつづきませんから、一日学校へ行くと二日は休むようにしていました。

乃木將軍　ある夜、九段から人力車に乗った乃木將軍は、車夫からこの感心な少年のことを耳にする。

少年　車夫のおじさんは、ぼくと同じ棟割り長屋に住んでいたんです。ですから、ぼくのことよく知っていたんですね。

乃木將軍　乃木將軍は本多武松少年の家へ寄ってみようと思った。少年も、またその母も、辛いことや苦しいことがあるたびに、

「ああ、こんなときに父がいたなら」

「ああ、こんなときに夫がいてくれたら」

と嘆き、

「これもみな乃木のせいだ」

と恨んでいるにちがいない。そっとお詫びをして行こう。乃木將軍はそう考えたのじゃな。さて、四谷鮫ヶ橋、質屋の路地の突き当りの、見るもいぶせき破れ長屋へ行ってみると、少